

有り難きひとびと

——新潟県佐渡島アリガタヤの生活史——

梅屋 潔

一、はじめに

新潟県佐渡島海岸沿いの黒森・白田地区は、半農半漁のムラムラのあつまりである。ひとつのムラが三、四〇戸で構成されるこの地域は夏は観光客で賑わい、青い海と、複雑な海岸線などの景観と、豊富な海の幸を観光資源とする。道路が整備された今日では、毎年トリアスロン大会が開かれるようになった。老人たちも、道路に出て盛んに声援を送る。しかし、「テレビが普及し、道路が整備されてからはそんなこともないが……。」と前置きして老人たちが当然のように語るのは、呪術や崇り、そしてムジナや生霊いまりやうなどの悪霊の観念である。

一般にものごとがうまくいかないと「けちがついた」などというが、黒森・白田地区では「ケチ」は人間の霊魂を指す名詞である。また、人を罵る場合のイデオムにも霊魂いまりやうが関与している場合が多く、ユリコボシ、「魂が足らん」、

「魂が少ない」など、人を罵倒する日常的な言葉にも憑依観が密接に定着している。ユリコボシとは、例えば本来一〇あるはずの魂を、迂闊にも「揺り零して」、二つほど落としてしまった、という意味である。この際、魂はまるで箆まきの上に乗った小豆のように、極めて具体的な、実体をともなった物体であるかのようにに語られるのである。村の内うち外問わずに無数に立つ地蔵や石塔は、人々の信心ぶかき、ことに、祟りなど靈魂の力を恐れる気持ちのあらわれでもある。

このような靈魂に関する信仰が極めて強い新潟県佐渡島には、その靈験があらたかであるところからアリガタヤ、アリマサン、巫儀に際して太鼓を激しく打ち鳴らすところからドンドコヤなどと呼ばれる民間宗教者が何人かおり、日々様々な悩みを抱えて訪れる人々に対し、トイギキ、ミクジというト占を行ったり、豊作、大漁、健康、長寿などの祈願を行なっている。なかでもカミオロシ、ホトケオロシなどを行なうアリガタヤは、神、人のほかムジナ・犬・猫・牛・馬など動物の靈魂と交流したり、それらを憑けたりすることができると信じられている。なかでも憑依靈、とくにムジナの靈を落とすことが強く期待されていた。

本稿の課題は、アリガタヤの生活史を通じて、佐渡村落社会の民俗宗教の一側面を素描することである。

一、アリガタヤの儀礼と生活史

(一) アリガタヤの巫儀

恐ろしいムジナの祟りや憑依を取り除くエージェントであるアリガタヤたちは、とくに変わった生活をしているわけではなく、行なう儀礼もさほど特殊なものではない。ここでは黒森地区のK・Hのトイギキと呼ばれる巫儀の例を記すが、師匠が共通していることもあって、この地域の他のアリガタヤ達も概ねこれに類似した儀礼を行なう。

K・Hの巫儀

最初に白い襦袢に赤い袴を着用し、祭壇に御神酒を二つ供える。幣のなかにはスズシという神がみの名前を書いたものを入れてあるのだが、これは人には見せられない。見せると見た人に大変な祟りがふりかかるからである。数珠をくくって祈り、拍手を打ち、ジンビョウショウトウグシシントウカジと唱えて九字を切る。そして、「神よ、この座にお下がりください」といって拝む。法華経を唱えたり、幣を振ったり、祝詞を唱えたりしているうちに神が乗り移る。予め依頼人に年齢とともに病の症状や不幸について聞いてあるので、それを念じながら掌を顔の前で合わせると、知りたいことが見えてくる。知りたいことが分かったら、幣を振って辞儀をし、神を送る。神が教えてくれる内容によって見えてくるものは異なっている。例えば潮の干満を占うときは、御神酒の中に網のような模様が見えると満ち潮である。そのような兆しが見えると無線で網を止めるように知らせ、コップの中の御神酒に浮かぶ網目の動きによって潮が引く時間もわかるので、次いでそれを教えてあげる。魚の群れの通り道、時期も占うことがある。九字を切って拝むと、ブリなどの魚が見える。白い腹を手前に見せているときは一五日以内に漁がある。背を見せていれば一五日は不漁である。向きを正確に見極めるともつと詳しくわかる。選挙の当選を占うときは、同様に九字を切り、御神酒のコップを見ていると、当選なら白い花がぱつと咲く。水死体も、どのような格好で死んでいるかわかるのだが、時には死霊が自分のところにきてしまい、体の具合が悪くなることもある。

家に死者が続く、流産、家族の病、不幸や異常死の原因など、何でもわかる。神の祟り、生霊・死霊・ムジナの憑

依は祈禱してはらう。小豆飯に五色の旗を一五〇本立て、御神酒を添えて海に流したり、豆腐を依頼者の年齢の数だけ切ってひとつひとつ紙で包み、川に流したりする。依頼者が呪詛をかけられている(イノラれている)と思われる時は相手の使った釘や団子、握り飯などの場所を教え、夜に始末するように助言する。病気の人が依頼にくるときは、その人の痛みが一週間前から自分のところに来る。例えば足が痛い人が来るときは、一週間前から自分の足が痛むのですぐわかる。

(二) アリガタヤの生活史

さて、このように「何でもわかる」という法力を持つアリガタヤは、どういった経緯でそうした力を手に入れたのだろうか。それを知るには、アリガタヤの語る生活史に耳を傾けなければならない。すでに『佐渡相川の歴史資料集 八』には、一二名のアリガタヤのライフヒストリーが報告されており、『新潟県史資料編 23』にはAをはじめとし七名のアリガタヤについての報告がみられる。黒森・白田地区には筆者が調査を開始した一九九一年三月には三名のアリガタヤと、黒森地区から別の地区へ嫁いだアリガタヤ一名とが活動していたが、そのうち一名が物故し、三名のアリガタヤが活動している。本稿では三名のうち黒森地区出身のS・Dと黒森地区のK・Hとを取り上げることにする。

S・Dのライフヒストリー

S・Dは、明治四十一年、黒森地区のオモダチ(重立ち)といわれる一三軒の名家のひとつ、H家に生まれたが、Dが生まれるとすぐに母が病死した。まもなくDは、H2家に養子にもらわれることになった。黒森地区に隣接する

地区のD家に嫁したが、三七歳のとき、心臓弁膜症や胃腸の障害で生死をさまよった。新潟の大病院で手術を受けたが治らなかつた。思い立って黒森地区にあるあらゆる願いをかなえてくれるというイシクラサン(石倉神社、もとは十二権現社)のことを思い出して一心に祈ると次第に快方に向かった。そのときまで彼女は神仏を信じないマセシヨウ(神仏について疑いを抱く者の意)で、回りで皆が掌を合わせていても、自分が合わせることはなかつた。そういうことは恥ずかしいことだ、と思っていた。しかし、イシクラサンのお陰で健康になったので、お礼参りに行かなければならないと思ひ、当時黒森にいたアリガタヤであるM・N(女性、故人)に神降ろしをしてもらい、お礼に何をしたらいいかお伺いをたてた。M・Nに聞いたイシクラサンがいうには、縁日に大勢の信者が籠ってくれるのに、水がないため難儀しているようだから、井戸を掘って欲しい。また、便所をつくってほしい、電気も通してほしい、という。M・Nが場所を指定し(S・D自身が場所を神がかって決めたと語るときもある)、託宣どおりに四人の人足を使って井戸を掘り始めたのは四三歳のときであった。途中、固い岩が作業を妨げたが、一七になる娘を神に捧げますと祈ったのでそれも取り除くことができた。堅い岩盤を約二間掘ると、大きなお骨が出たので作業は中断した。この前後に高名なアリガタヤ、Sサンに通うようになっていた彼女は、Sサンに伺いをたてると、神霊が乗り移り、「我は今から六八〇年前にこの山の上の洞穴に棲んでいたのであるが、山が崩れて岩の下敷きになってしまった。この付近はどこを掘っても水は出るのだが、我が娑婆へ出たいばかりに、そのもと、難儀な場所を掘らせた。この思は忘れないから、孫子孫の代にいたるまで、困ったことがあったら相談にまい」といった。このお骨は龍のものであり、現在、神社の床下の神棚の下辺りに納められているという。相川のアリガタヤであるM・Kにトイギキをしてもらうと、あと二間で水が出るという。その通り掘ると、水が出た。人足には一日あたり三百円の日当をやっていたので、三万円ほど使った。水が出たのは四四歳のときであった。四五歳のとき、Sサンにイシクラサンの意向をきくと、「今度は神を守るものが欲しい」といった。そのときからイシクラサンの月例祭にSサンが来る時などには、赤飯を炊くなどな

かと手伝うようになった。四六歳からイシクラサンの祭礼のときに漁つけを頼まれるようになり、四七歳にはアリガタヤと呼ばれるようになった。

息子が「かあちゃん、おらラジオ屋になりてえ」といって困らせたのもこの頃のことである。息子は勉強が得意でないどころか一七歳になっても十までの足算もできないようなノールス(脳留守)であったので、当然無理だと思っただが、諦めることがあるか、と兄に言われて神にすがることにし、水垢離をとることにした。何時にやればよいのか迷いつつ床に就いたある晩、枕元を魚籠をもったでっぶり太った女性が、すつと通った。はっと目覚めて時計を見ると、午前一時五、十分前であった。この時間にすればよいのだと悟り、毎夜その時刻に水垢離をとった。一年と七か月目に、念願かなって、息子の〇電気への就職が決まった。

四八歳のある日、家を建てるために夫が方々へ人足を捜しに行ったが見つからなかった。その夜、眠っている自分と夫の間にイシクラサンが四つん這いのムジナの姿になって現れ、暫くするとふわっと消えた。夫は日中の疲労のため泥のように眠っていたので気がつかなかった。Sサンにその話をすると、「神様が手伝いにきてくださったのだ」という。事実、翌朝材木は綺麗に運び出されており、後二本を残すのみとなっていた。五〇歳のとき、いまの石倉神社の社殿を建て、M・Nさんが二万円近い寄進を集めてくれたので電気を引き、お籠りの際便利のように風呂場もつくることができた。この風呂に井戸水を入れて沸かし湯治すると、どんな難病でも治る。リュウマチなら三週間で治る。先日、つい一月前も(一九九一年九月五日現在)埼玉から噂を聞いた人が来て一升瓶二本トラックに積んで持ってきた。「埼玉の病院で治るはずのない患者がこの水の御陰で治った」とその人は言っていた。

現在、自宅の二階の広い部屋に祭壇をつくり、イシクラサンの出張所になっている。祭壇の中央に石倉大明神、二つ岩大権現、千松様をまつり、左側に古峯ヶ原神社と富士浅間神社、右側には蔵島神社をまつっている。祭壇の右側には仏壇を置いており、夫や息子の位牌を置いてある。古峯ヶ原神社をまつったときは、肅が家の上を三回まわり、

「うれしくおもう」と言ったという。

縁日は旧暦の毎月十一日で月例祭といい、特に十月は大祭を行なう。月例祭のおりには信者は朝十時頃までお参りし、夕方帰ってゆく。大祭のときにはお参りして帰る人もいるがお籠りをする人もいる。当初は三〇〇人位の参拝者があり、うち五〇人ほどが籠った。現在では参拝者は一〇〇人程度で、うち一〇人ほどが籠る。

「というわけで、この私のまつるイシクラサンは強力だ。大変、法が効く。自分の病も息子のノールスも治ったのだ。ムジナのことをあんだ(＝梅屋)がたはトンチボ(頓智坊)、トンチボというが、そう呼んではいけない。ヤマンカミサン(山の神様)といわねばならない。イキガミサン(生き神さん)なので一心に祈れば何でも聞いてくれるのだ。魂はついて歩くものだと言い聞かされているから、東京に帰っても困ったことがあったら一心に祈りなさい。必ずイシクラサンはいうことを聞いてくれる。一心に祈って一緒に救ってもらいませんか。」

S・Dは名家から養子に出され、病を経験し、信仰の力でそれを克服、先輩アリガタヤの助けを借りて、信仰の証しとして井戸を掘るなどする経験が正確な年齢とともに語られている。とくに注目されるのは、信仰のお陰で息子が一人前になったということが強調されている点である。実際には一人前になった息子というのも結局早死にしてこの世にはもはやいないのであるが……。

続いてK・Hの例をみてみよう。

K・Hのライフヒストリー

黒森のI家に、七人兄弟の長女として生まれた。母はアリガタヤSサンの子守をしていたし、母方オジには神主と、黒森のアリガタヤM・Nの義理の父親K・Nなどがおり、母のイトコが高名なアリガタヤ(F・T)であることもあ

って、子供の頃からそういった霊の世界に馴染んでいた。靈感も強かったようで、K・Nの息子の船が沈むのを事前に言い当てたりしたことがある。

一三の時、正月にI村に叔母さんを訪ねていった。夫に先立たれ、叔母さんは子もいないので家にはおらず、寺にいた。弟を背負ってI村にゆく途中、背中がたすき掛けのように白くなっていてトンチボ（頓智坊II絡）に出会った。始めは犬かとも思ったが、それにしても変な顔をしていた。よく、不細工な女性のことをトンチボみてえだ、っていうけれど、たしかに変な顔をしていた。酒が欲しいらしく、とうとう寺まで後をついてきた。ところがどうしたわけか、寺までくると私は突然正気を失って倒れてしまった。Y村の神主のK氏が駆け寄り助けて起し、金属の鍋を炙ったものを上下させてトンチボをほらい、戸を開けてそれを出そうとした途端、裸足のまま走り出していったという。気が付いた時には、ムジナに出会った場所で倒れていた。皆自分の後を追ったのだが、あまりの速さに誰も追いつくことができなかったらしい。以来、頭痛持ちになり、いまでも時折痛むことがある。

その後、靈力を認められてM・Nのヨリマシとして働くようになった。一三歳のときであった。M・Nが九字を切るとなにかが乗り移って喋った。その間のことは覚えていないので後で聞かされて知るだけである。

二四歳のときにY・Hと結婚し、この家を継いだ。このH2家は村の一三軒のオモダチのひとつであるH1家の分家である。夫の父親はH1家の婿養子で、長女K・H1と結婚した。H1家にはカカリゴ（跡継ぎになるべき直系男子）がいなかったため、当然その夫婦が跡を継ぐはずであったが、山林所有権を巡って夫の父とその義父は争う羽目になり、分家した。争いの種を蒔いたのはH1家の養女Y2であり、財産欲しさにあらぬことを養父に告げ口したのである。H1家は三女が継いだ。H2家は相続権で訴訟を起こした。K・H2は田畑の相続権が認められたものの、訴訟で借金をつくってしまった。山林や新築の蔵は手放さざるを得なかった。こういったいきさつもあり、H2家は区長、副区長、議員の被選挙権は認められていないが、これは不当なことだ。Y2はS家の養子と結婚して子のないY3家

の夫婦養子にはいった。Y2には当然財産はなかったので幾分H1家が分けてやったようだ。

夫との間に四人の子をもうけたが、長女は幼いころに病気が元で口がきけなくなってしまった。三七歳のときに養母が病気でなくなり、夫は結核で療養所に入院していたが病気を苦にして木に首を吊り自殺した。あまりに酷いことばかり続くと親戚がSサンに見てもらった。するとY2の生霊が出て、おれの目が黒いうちに箱を三つ並べてやる、と言った。事実、直後に二歳になる末の息子が引き付けを起し、死にそうになった。薬を口移しにのませ、必死の看病のお陰で一命はとりとめたのである。以来Sサンの所に通うようになり、朝晩Y2の呪いを避けるために必死で祈った。Sサンに祝詞と太鼓を習い、ヨリマシとなったり太鼓を叩いたりして手伝うようにもなった。M・Nのヨリに立つだけでなく自分で祈禱することができるようになったのはこのころのことである。早朝に朝のオツトメと称して祝詞を捧げる他、依頼があると神降ろし、仏降ろし、漁付けなどをやるようになったし、石倉神社（イシクラサン）の井戸や川で水垢離をとったり、断食したりして修行した。

四五歳のときSサンの助言で実行教の免許を取得した。祭神を勧請しなければならぬと言われ、Sサンの指示に従ってイシクラサンの後ろにある岬に龍神様の祠をつくって祀り、自宅にも祭壇をつくった。イシクラサンのカギトリ（神社、祠など管理すべき家）であるムラのオオヤ、H3家は、イシクラサンに龍神の伝承がないと怒ったが、カギトリなのにしっかり管理しないH3家の方がイシクラサンの祟りにあって、イシクラサンの縁日にカカリゴが死んだ。あれは、H3家にアトイレ（後妻）が入ったものの呪詛のせいでもあるが、そもそもイシクラサンを大切にしないからだ。H3家のうちの地所を乗っとうとするなど、なにかと悪いことをするから、罰が当たって子がタタナイ（跡継ぎが生まれない）。

五十代の頃、信仰の厚い人々と連れだって聖地を巡礼した。その際には不動の滝にうたれ修行などもした。会津にある龍神をまつる神社に参詣し、絵師に描いてもらって祭壇に飾っている。この絵師は、あんたは運がよい人だ、口

の中に金の球が入ると、といていた。

一九七五年前後に石倉神社に扶桑教行者（御嶽行者とも）のFが住み込むまでは、イシクラサンの掃除は自分がしていたし、依頼があれば、拜殿で祈祷をすることもあった。現在は、依頼先や自宅で祈祷をしている。

口のきけない長女と二人暮らしで、田畑を耕作し、ワカメを乾燥させて売ったり、アリガタヤの謝礼などで細々と暮らしている。農作物は、自分たちが食べる他、子供に送ってやると綺麗に無くなるので、収入のほとんどは社会保障に頼っている。

一九八六年には、雨の中を無理して鎌で稲の取り入れをしていたために体を壊し、一時入院した。現在も具合はよくなるらないので、通院している。イシクラサンのお籠りにも以前は参加していたのであるが、具合が悪いため、もう行っていない。

靈感が強いため、病氣や不幸はすべて自分のところによりかかると、神に選ばれた身であるからやむをえない。夫に先立たれたのもそのせいであり、実は結婚相手として候補に上がった男性は夫以外にも何人かいたのであるが、すべて早死にしまっていていまは誰も生きていない。霊のせいでは健康状態も芳しくなく、一九九三年の九月には前歯を上下ともに抜く羽目になったのでこうして喋るのも大変億劫である。

普通の人ならば自分が経験しているような不幸や病は絶えられないであろうが、神の加護があるのでさほど辛くは感じないし、お金も足りなくなるとどこかから入ってくるから不思議である。と、いうわけで神というのは有り難いものである。

ここで繰り返し語られるのは、むしろアリガタヤにふりかかる膨大な不幸の歴史である。H2家という何かと問題の多い家に嫁ぎ、親族にまで呪われ、H3家と土地所有権問題で争い、夫には先立たれ、子にも恵まれないう、

まさしく滅多にない…有り難いほどの不幸が語られている。H2家は、一三軒あるムラのオモダチにも含まれず、土地や山林の所有権などの点で、極めて厳しい立場に置かれていた家である。サンニンヒトリ（三人集まってようやく一人前の財産になるという意）という村落で最も低い地位に置かれている。

K・Hと土地所有権問題で争っているH3家の主人は、次のように語る。

そもそも、あの家（H2家）は村の正式な構成員には含まれるべきではない。実際被選挙権も認められていない。Y・Hの父親はろくでもない放蕩ものであり、義理の父親（H1家の当主）の財産を勝手に使い込んだことが発覚したため家を出されたのである。罪を免れようと義父を燃えさかる炭焼き釜に押し込んで殺そうとまでした男だ。殺人未遂で有罪判決を受け、何年か刑務所に行っていた。うち（H3家）の地所にも勝手に杭を打って所有権を主張しているため、弁護士を立てて裁判で争っている。自分たちがカギトリをつとめるイシクラサンの裏手にも妙な祠を勝手に立てた。龍神だというのであるが、このムラにはそんな伝承はない。あの婆さんも狂っているから、あんまり近づいてはならん。

H3家はムラのオオヤであるから、必然的にムラの秩序全体を敵に回して暮らしていることになる。これは、アリガタヤでなければ不可能なことである。

これまで見てきたように、様々な不幸を克服したことがアリガタヤたちの権威の源となつていふことができるのであるか。克服といっても事態はとくに改善されたわけではないのではないか。K・Hにいわせれば信仰の力でこの程度で済んでいる、ということなのだろうか…。

三、有り難きひとびと——結びにかえて——

有り難い、の本来的な意味として滅多にない、というものがある。彼女らのライフヒストリーを見てみると、彼女らはまさに滅多にないような不幸に襲われているのであり、彼女らの話は次第次第に半ば不幸自慢の様相を呈して行く。

貧困、病い、親族とくにカカリゴ（家を継ぐべき長男）の死、その他の不幸などなど。アリガタヤを訪れる人々がアリガタヤに相談する悩みの種はすべて、アリガタヤ自身が経験していることなのである。

とくに決定的なのは、カカリゴと呼ばれる長男の病いや死である。この地域の嫁に期待されるのは健康な体とそれによる労働力、そして長男を生み育てるという二点に集約される。健康な肉体は激しい嫁づとめを遂行するのに必要だった。従って、病気がちであるということは激しい非難の対象となるのが普通だったのである。また、「三年たつたらだしてもええ」といわれ、三年経っても子ができない場合は離縁されるのが極めて当然のように考えられていた。嫁は子供ができて暫くして、シャクシワタシ（杓子渡し）という儀礼を経て初めて、婚家の正式な構成員と見做されるのである。それまでは財布や箆笥などは実家においておくのが普通であり、家の財政事情についてはまったく知られることがなかった。カアサンスル（主婦権を行使する）までの嫁は、実家の構成員でもなければ婚家のそれでもない、著しく不安定な立場に置かれていた。

一つの家は一組の夫婦とその子供で構成されるのが理想とされていたので、離縁されて戻ってきた娘（デモドリ）は家の中で厄介者であり、死んでも家の墓に葬られることはない。このため、各家の墓地には家の墓石の隣にこうし

た無縁（女性はアバないしオバ、男性はオッサンと呼ばれる）のための無縁墓が並んでいるのが普通である。死んでも祖霊にはなれないのである。

従って、嫁は健康に恵まれてよく働き、自分の長男を生み、大切に育てることが理想的な一生とみなされた。マツイ（末裔）ないしマツケと呼ばれる血縁を家の中に残すことは、家の中で自分の立場を保証するためにも、死後に祖霊として祀られ靈魂の安寧をはかるためにも必要不可欠なものであった。

アリガタヤとは、こうした通常は理想とされる手続き全てに失敗してしまった人々である。見てきたように、アリガタヤS・D、K・Hともに、カカリゴが死んだり、病いに罹ったりして自分のマツイにまつわる不幸が跡を絶たない。黒森、白田地区の伝統的な考え方によれば、これは、本来嫁の責任が問われる出来事である。例えばならかの崇りが介在しているか、前世で悪事を働くなど、本人の業が問題にされ、責任を追及されても仕方がない事態である。しかし、そうはならなかった。アリガタヤは、アリガタヤに成るといふまさにそのことを通じて、自分にふりかかった数々の不幸を自分のなかで、そして地域社会の中で合理化したのである。

そう考えるとK・Hの「神に選ばれた身だから」という言葉は一層のおもみを帯びてくる。ひとは、その身にふりかかる病いや不幸を誰かに代わってもらうことはできない。どうしてこのような滅多にない病いや不幸が自分にだけふりかかるのであろうという回答の出ない問題に対する深い解釈は、これらの人びとの生き方を劇的に変えた。神に選ばれ、不幸に耐える宿命を背負わされたという信仰に支えられているのでなければ、次々にふりかかる不幸や病いに、一体誰が耐えられるだろうか。不幸に悩む魂は、アリガタヤという癒しに関わる職業にたずさわることで、はじめてそれ自身癒されることになるのだ。こうしてみると、朝晩オツトメと称して彼女らが祈る声は、本来自分たちを祖霊としてまつるはずだったマツイを失った人々が、自らの魂を弔うレクイエムに聞こえてくる。

〔付記〕題材の都合上名前は挙げられないが、調査に協力して下さった人々に感謝する。また、執筆の機会をつくって下さった木曜会の皆様、谷口貢、鈴木正崇ら諸先生方に感謝したい。本稿で用いた資料は一九九一年三月から一九九四年九月まで断続的に行なわれた筆者自身の調査と、一九八六年から一九八八年まで慶応義塾大学文学部吉田禎吾研究会によって行なわれた調査とに基づいている。吉田研究会の資料をお貸し下さり、絶えず指導して下さい。なかでも本稿執筆にあたっては村田章子「佐渡小杉町のアリガタヤ」(慶応義塾大学文学部一九八六年度卒業論文)がもつとも参考になった。〕

1 青柳秀雄「入川付近の方言」(青柳秀雄編『佐渡海府方言集』非売品、昭和六年、慶応義塾大学蔵)にはケチリ人魂とある。

2 一九九四年九月二日、次のような話を聞いた。地蔵ができる理由を象徴的にあらわしている。I「Kのうちの娘は最近死霊に憑かれているのを、家人は必死に隠しているが、人の口に戸は立てられんので、今は村の者は皆知っている。あれは、あの娘が付き合っていたT村のバイクに乗っていたアンチャンが、娘に会った帰り道に柱にぶつかって死んだ、その霊が来ているんだ。あれは、思いを残して死んだのでどっかの家が折れて事故の現場に地蔵を立てて祀れば治るとおもう。」、Y「それなら、そう教えてあげればいいのに」、I「隠しているのにそんなでしゃばりはできない……」。

3 ムジナはトンチボ(頓智坊)ともいわれ、山中や村外れの岩穴に住み、兎などの小動物や木の実などを食す雑食の野生動物で、特にコウヌカ(米糠)を好む。鋭い爪と歯を持っており、人家付近に夜間あらわれては芋などの農作物を荒らす。食料が乏しい時には靴などを齧ることもある。その性質は極めて獷猛であるといわれる反面、非常に気の弱い動物であるともされており、大きな音がすると直ぐ気絶してしまう。そのため「魂が軽い」ともいわれている。大量の食料を食す分、

糞も多く、また決まった場所で排便する性癖があるところからヒリダメという糞の溜まり場をみるとムジナの巣がどこにあるか分かるという。また綺麗好きであり、巣である岩穴の中は落ち葉まで綺麗に取り除かれ、滑らかな岩肌や土で固められているといい、巣の中では排便することはない、とも伝えられている。目がよすぎるために昼間は穴から出るとなにも見えず、そのため夜間に活動する。村人は明け方仕事にゆくときや、夕方帰宅する折りに遭遇することが多く、夜間はキューーまたはキヤーという鳴き声が聞こえるのでムジナが活動しているのがわかるとされた。懐中電灯で照らすと猫は立ち止まるがムジナは立ち止まらずに走り去るといいう。指先が器用であるといわれ後ろ足だけで直立して振り向き、お辞儀をしたり、子供を背負って移動したりする子連れのムジナがいる、など村人たちの語るその行動様式には人間を連想させるものが多い。毛並みは大変よく、コロコロしているといわれるように豊かな毛皮で覆われており、その色や模様は茶から白まで、無地から縞まで様々な種類がある。年をとったムジナは背中に十文字のたすき掛けの模様があらわれるという。その毛皮を剥いで新湯で売却し、肉は食べていたという猟師もいたが、現在では禁猟区に指定されたせいもあって、捕獲するものもなく、繁殖しているという。年をとったムジナの肉はまずいというが、若いのはうまいという。

4 このようにアリガタヤは、先輩のアリガタヤについて祈祷その他の作法を習い覚えた後に独立するのが普通である。謝金は、卜占の場合二、三千円で、数度に渡る儀礼をともなう憑きものおとしや呪詛返しでも十万円程度と、決してそのみで生活してゆける額ではない。

5 佐野賢治「巫俗とムジナつき」(相川町史編纂委員会編『佐渡相川の歴史 資料集八』新潟県佐渡郡相川町、一九八六年)。

6 桜井徳太郎編『新潟県史資料編23、民俗・文化財2、民俗編二』(新潟県、一九八四年)。

7 佐野、前掲書。桜井(編)前掲書。

8 佐野、前掲書。

9 岩本通弥「家族と親族」(相川町史編纂委員会『佐渡相川の歴史 資料集八』新潟県佐渡郡相川町、一九八六年、一七一～二八六頁)、「佐渡のチワケノシンルイー土地を媒介とした〈親族〉の構成」(『社会民俗研究』第二号、社会民俗研究会、一九九一年、三一～六七頁)、「イエとムラの空間構成―新潟県佐渡郡相川町南片辺の事例」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第四三号、一四五～一九三頁)参照。また既に梅屋深「邪まな祈り―新潟県佐渡島における呪詛」(『民族学研究』五九

- 卷一号、一九九四年、五四～六五頁）で整理を試みている。
- 10 岩本、前掲書参照。
- 11 岩本、一九八六年、一七四～一七五頁、一九九二年、一六六～一六七頁参照。
- 12 岩本、一九八六年、一九四～一九五頁参照。
- 13 岩本、一九八六年、一九六頁、浜口一夫「人の人生」（相川町史編集委員会、前掲、二八七～三六七頁）三六四頁参照。
- 14 渡辺公三「森と器―治療者はどのようにして治療者となるか（クバ王国の例から）」（波平忠美子編著『病むことの文化』海鳴社、一九九〇年、三～九頁）、「病いはいかに語られるか―二つの事例による」（『民族学研究』四八巻三号、一九八三年、三三六頁）参照。